

原爆のむごさ 世界へ

日本の出版物を長年にわたって海外に紹介した日本著作権輸出センター(東京)創業者で、同社相談役の栗田明子さん(83)＝芦屋市在住＝が10日、「私の扱った戦争と平和に関する本」をテーマに芦屋市民センターで講演した。芦屋市立公民館が企画し、市民ら約60人が参加した。



絵本「ひんじまのピカ」(表紙)

日本の出版物を紹介 栗田さん講演

栗田さんは甲南女子高校を卒業後、商社や出版社などを経て、1984年に日本著作権輸出センターを設立。2007年に同社社長を退任するまで、日本の小説や絵本など約1万3千作品を約40カ国に紹介した。

栗田さんは講演で、心に残る作品に「ひんじまのピカ」(80年、小峰書店刊)を挙げた。「原爆の図」で知られる画家の丸木俊さんが、被爆者の体験などをとくに原爆被害の惨状を描いた絵本だ。栗田さんは高校1年の時、広島への修学旅行で原爆症の講義を受け、ケロイド状に焼きただれた被



講演する栗田明子さん＝芦屋市業平町の市民センター

爆者の背中を触った。「被爆国として原爆のむごさを世界に訴えた」との思いが強かったという。しかし、米国では、絵本に対する編集者の反応は「加害者として出版は難しい」という声がほとんど。そんな中、ある出版社の編集長が「自分の手で出したいが、大手のため、営業が反対する」と言い代わり、中堅出版社を紹介してくれた。その後、出版され、米国で賞を受けるなど評価されたという。栗田さんは欧州にも売り込み、世界14カ国以上で出版された。

栗田さんは「赤を同じくする編集者の協力で出版できた。トランプ大統領と金正恩氏にぜひ読んでもらいたい」と話した。講演では、画家の安野光雅さんが企画した「まるいちきゅうの

「トランプ氏・正恩氏も読んで」

まるいちきち」(86年、童話屋刊)も紹介した。安野さんと栗田さんが2人でアイデアを出し合い、世界8カ国の子どものための1日の生活ぶりを、各国の画家に描いてもらった絵本だ。

有名画家たちに安い画料で引き受けてもらえるかが問題だったが、英国の編集者に相談すると、「世界平和がテーマの絵本だから、印税の一部はユニセフに寄付することにしよう」と。おかげで画家たちも快諾。日米英などの四つの国・地域で出版された。

栗田さんは講演の最後に、この絵本に記された子どもたちへのメッセージを読み上げた。

「太陽は、せかいじゅうのだから、とっても、おなじで、ひとつしかないのです。私たちの立っている地球も、たったひとつしかありません。あなたたちが大きくなって、そのことがほんとうに、わかるようになったら、あなたたち、みんなが、いつまでも、なかよく、くらするすばらしい地球であることをねがって、この本をつくったのです」

(鈴木裕)

原爆の恐ろしさ伝えるため



日本の書籍の海外出版に長年携わってきた日本著作権輸出センターの栗田明子相談役(83)が、芦屋市内で講演した。栗田さんは、24歳で上京するまで西宮市と芦屋市で育ち、4年前から再び芦屋で暮らす。

タイム社日本支社を経て、著作権エージェンシー

日本著作権輸出センター相談役 芦屋の栗田さんが講演

エントの仕事に就き、北村夫さんや吉本、ななさんらの小説を仲介。ポロニーヤ国際児童図書館に早くから参加し、安野光雅さんら絵本作家の紹介でも大きな役割を果たした。

講演では、14カ国で出版された丸木俊之の絵本「ひろしまのピカ」など戦争と和に関する本をめぐり、思いを語った。

栗田さん自身、疎開を経験し、戦後間もなく母親を失った。進学した甲南女子中は戦災で校舎を焼失しており、高校の修学旅行では広島を訪問。被爆者の姿を深く胸に刻んだという。

著作権の仲介にあたって「被爆国として原爆の恐ろしさを伝えることを意識していた」と振り返りつつ、原発問題や緊張の高まる国際情勢をふまえて「今こそ多くの手に読んでほしい」と訴えた。(田中真治)

神戸新聞NEXT

2017/8/8 05:30 神戸新聞NEXT

文学からみる戦時下の暮らし 芦屋で平和展



大戦下の暮らしを切り取った文学や空襲で焼けた「ゴッホのひまわり」が紹介される＝芦屋市民センター

文学に描かれた戦時下の暮らしをひもとく平和展「阪神間文学にみる大戦下の街と暮らし」が、芦屋市民センター(兵庫県芦屋市業平町)で開かれている。16日まで。

同センターが企画。野坂昭如氏や遠藤周作氏など阪神間ゆかりの作家が、戦時中の経験を作品に描いている。平和展では作品中の戦時下の暮らしを切り取り、写真を添えて16作品を紹介する。

西宮市育ちの小説家、佐藤愛子さん著『これが佐藤愛子だ』の展示では、青銅製の門灯の笠や、阪神甲子園駅前の銅像が供出されたことが描写。佐藤さん自身も西宮で被災しており、甲子園球場の鉄傘が取り外された場面で、「大鉄傘が兵器になる」と当時の心情を作品に盛り込んでいる。

また、旧満州国皇帝だった愛新覺羅溥儀のめい、福永博生さん(76)＝西宮市＝から提供を受けた写真13枚なども展示。来日した溥儀を迎える昭和天皇の様子や博生さんが溥儀の実弟で、父溥傑に宛てた手紙なども展示されている。

1945年8月5日の神戸大空襲の際、芦屋で焼失した「ゴッホのひまわり」の紹介もあり、同センター職員(66)は「文豪が大戦をどう表現したのかを見て、新たな視点で当時の生活を知ってほしい」と話していた。

午前9時～午後9時半。日曜祝日は午後5時まで。火曜定休。芦屋市立公民館 TEL 0797・35・0700

市民センター

小説の舞台 写真で紹介

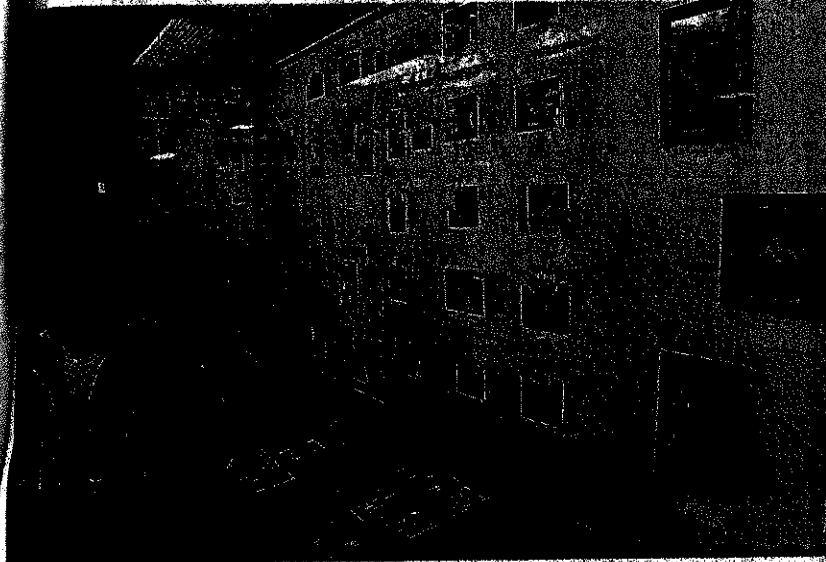
芦屋市在住の作家榎野道流さんの作品に登場する店や施設などの写真展が、同市民センター(業平町)で開催されている。8作目まで刊行中の小説「最後の晩ごはん」シリーズは、阪神芦屋駅周辺が舞台。榎野さんは「(芦屋のイメージは)誇張されがちだが、地に足の着いた街だと伝えたい」と話す。

(中川 恵)

芦屋の作家榎野さん「最後の晩ごはん」

パン店など20カ所

榎野さんは、兵庫医科大学に作家デビューした。非常な学業後、大学院生時代「勤の監察医」として勤務した



作家の榎野道流さんと、小説に登場する店や施設の写真が並ぶ会場＝芦屋市業平町

経験もあり、創作活動の傍ら、各地の医療系専門学校などで解剖学や法医学を教えている。

「最後の晩ごはん」は、活動休止に追い込まれた若手俳優が、故郷の芦屋に戻って食堂で働きながらの触れ合いを通して成長する物語。芦屋書局や芦屋神社、パン店、焼き菓子店など、実在する店舗や施設が作品に多数登場する。今回、展示を企画した市立公民館の職員が、そのうち20カ所の写真を地図と一緒に並べた。

また会場では、市民が自らのペット写真を展示する「芦屋のペット大集合写真展」も同時開催。ウサギや犬、猫などの応募作品約70点が並ぶ。猫2匹と文鳥1羽、イモリ1匹を飼っている榎野さんも出展。パソコンで小説を執筆する際、必ず文鳥が左の袖口に入っているといい、その様子を収めた写真などが楽しめる。

いずれも9月1日まで。無料。午前9時～午後5時半(日曜日は午後6時まで)。最終日は正午まで。22、29日休み。市立公民館0797・355・0700

スタッフ編

厚郎の文化回廊

12月16日 世界的な指揮者、佐渡谷氏が指導するストラスズベークエストロのオーケストラの演奏、イオリン奏者、花井結さんの演奏会が芦屋市民センター音楽室で開催される。オーケストラのバイオリニスタ、タカシキ、オーストラリアの吹奏楽四重奏など、芦屋市在住の高校3年生、倉本孝生、音楽コンクール大阪大会では中学・高校の部ともに第1位。

演奏スタイルは、みずみずしく伸びやかで、自由な歌心を持っている。

芦屋市在住の中学1年生の北村陽菜は、6月に「若い音楽家のための手紙」コンクール国際コンクールで、エロ部門で優勝し、栄冠を手にした。

だが、幼少時から大器の片りんを現し注目されていた。小学1年生の時に、子エロを学ぶ子供たちの会で弾いたピアノのソロを聴いたが、素晴らしい音楽性を感じた。来年も、毎日聞く、芦屋市長も「ストラスズベークエストロの演奏会では難易度が高いソロを、子どもの子エロソナタ全集に加え、ハッハの無伴奏子エロ組曲第一番を演奏する。

以前、サ・フェニックスホールに勤め、今は芦屋市民センターで音楽公演と指揮事業を担当する。若い才能と、真の音楽に巡り

10代の弦楽奏者2人演奏会

白の幸せを祝福と共有できるのがうれしい。花井さんの演奏会は申し込み制で、1席500円。正員を越すと抽選になる。北村さんの演奏会は、来年2月にチケットを発売する。ともに申し込み、問い合わせは、電話(0797)7-3507(00)か、(河内文化会事務所・ア



佐谷紀世さん

厚郎の文化回廊

没落していく旧家の4姉妹を描いた谷崎潤一郎の名作『細雪』は三度映画化された。昭和34年版は高崎秀子ら「新東宝」の看板女優たちが出演。京マチ子や山本富士子が出演した昭和34年の天映一版には阪急の芦屋川駅や甲陽線、六甲のホテルなどが登場する。

『東宝』が制作した昭和58年版は、岸恵子・佐久間良子・吉永小百合・古手川祐子という配役で、豪華な衣装も話題を呼んだ。

この東宝版『細雪』上映に続き、次女役で出演した佐久間さんと、古手川さん演じる未婚の恋人役を演じ

佐久間さんが芦屋でトークショー

た桂米朝治さん(当時桂小米朝)を招いたトークショーが20日(土)、芦屋ルナホールで行われる。午後2時開演。前売2500円、当日3000円。問い合わせは、芦屋市民センター(0797-350700)。聞き手は、私がつとめる。

舞台女優としての佐久間さんの代表作『唐人お吉』が劇場飛天現・梅田芸術劇場)で再演されることになり、佐久間さんが伊豆下田へお吉の墓参に行くというので、毎日新聞学芸部の演劇担当である畑律江記者らと同行したことがある。阪神・淡路大震災から2年後のことで、『細雪』の舞台となった芦屋の復興状況を佐久間さんは気にかけていた。

ルナホールでは大映版『細雪』に出演した山本富士子さんを11月2日(土)に招いて講演会を開催する。



芦屋でのトークショーに出演する佐久間良子さん

天 気	
きょう	あす
6時	25日
9	18
12	21
15	24
18	
21	
24	
25日	25日
26日	26日
27日	27日
28日	28日
29日	29日
30日	30日

週間天気	
30日(土)	1日(日)
2日(月)	3日(火)
4日(水)	5日(木)
6日(金)	7日(土)
8日(日)	9日(月)
10日(火)	11日(水)
12日(木)	13日(金)
14日(土)	15日(日)
16日(月)	17日(火)
18日(水)	19日(木)
20日(金)	21日(土)
22日(日)	23日(月)
24日(火)	25日(水)
26日(木)	27日(金)
28日(土)	29日(日)
30日(月)	1日(火)

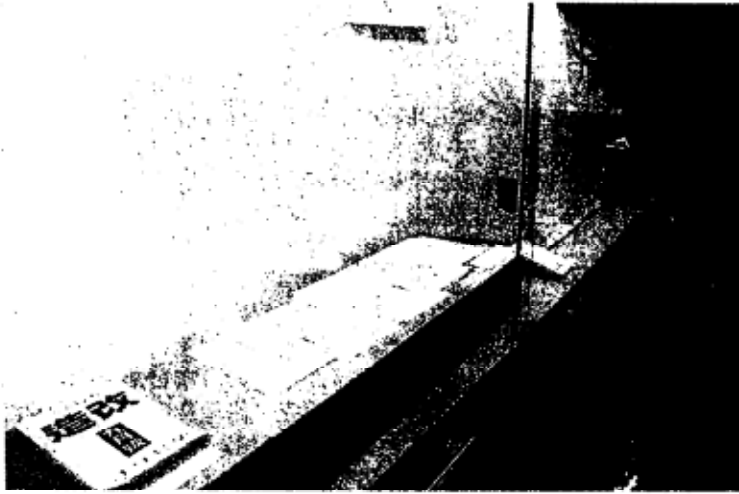
碎花と文豪の交流回顧

米国詩人・ホイットマンの詩集「草の葉」の翻訳や歌集「悲しき愛」で知られる詩人・富田碎花(1890～1984)と、小説家の芥川龍之介(1892～1927)や谷崎潤一郎(1886～1965)との交流を紹介する企画展「碎花をめぐる文豪と文化人」が芦屋市民センター(市業平町8)で開かれている。10月2日まで。【石川勝義】

芦屋で企画展 来月2日まで

富田はホイットマンや英国詩人・カーペンターの訳詩集を出版し、大正デモクラシー期の日本に英米の民主主義思想を紹介した。盛岡市出身で、23歳の時に肺の療養で芦屋市に住み始めた。富田が住んだ家には一時、谷崎も住み、市は1987年に「富田碎花旧居」(市宮川町)をオープン。今年開館30周年を迎えたことから、市が富田と文豪

「旧居」開館30周年



「芥川君を憶(おも)ふ」が寄稿された雑誌「改造」(左手前)と原稿のコピー(中央)＝芦屋市民センターで

谷崎との書簡など紹介

年9月号の雑誌「改造」に寄稿し、芥川が「草の葉」の中の「この上ない幸福な死の囁き」とい

「改造」も展示されている。また、富田は校歌の作詞にも積極的に取り組み、県内の30校以上に作品が残っている。推敲を重ねた様子が伝わる県立御影高校や県立柏原高校の歌詞の原稿も見る事ができる。

午前9時～午後9時半(日曜祝日は午後5時まで)。入場無料。10月1日午後2時には芦屋市民センター「ルナ・ホール」で、詩人の合川俊太郎さんを招いた講演会「富田碎花と谷崎潤一郎」(当日1200円、前売り1000円)も開かれる。問い合わせは市立公民館(0797・35・0700)。

富田碎花 足跡たどる

「川君を憶ふ」の自筆原稿の
複製など、文化人との幅広い
交友を示す資料30点以上
が展示されている。

1日 谷川俊太郎さん講演

長年、富田市の文化活動を支えてきた。碎花
人富田碎花の足跡をたどる。川君を憶ふの自筆原稿の複製など、文化人との幅広い交友を示す資料30点以上が展示されている。10月1日の講演は、芦屋ルナホール(業平町)で。文化アロテュロサーの河内厚郎さんの講演に続いて、谷川俊太郎さんが詩の魅力について話し、詩「未来へ」の朗読を披露する。最後は、碎花が作詞した市内3小学校の校歌を合唱する。午後2時開演。前売り券1000円(1200円)。079-7-355-0700 (竜門和諒)



富田碎花の足跡をたどる写真や資料が並ぶ会場＝芦屋市民センター